

第一章 事故、それから的一年



## 予感

暑かった短い夏の終わりを告げる様に、百日紅が紅色や、白色の小さな花をそこここに付け、初秋の訪れの感じられるその日、九月十三日は、公民館活動の手作り人形の日であり、誰よりも早く公民館に着き、窓を開け、涼風を顔に受けて机を並べる。

いつもの通り手はお人形作り、口はおしゃべりと楽しい一時であった。その時、「ねえ、堀江しのぶが亡くなったの知ってる。まだ若いのに可哀相ねえ」

「えっ、堀江しのぶ？」

何処かで聞いた名前である。最近めっきり忘れっぽくなった私の頭が、やっと思い出したのである。マシユマロの様にふっくらし、大きな目をくりくりさせてた女優で、まだ二十三歳だというのに……。

可哀相にと思いなながらも、その時私は、愛する我が子を失って、身を切られる様な親の気持までは、理解する事が出来なかつたのである。

その日私は、久し振りに仲間の方達とお昼を共にし、その帰り洋行と同級生の母親から、

「洋行君、元気？」

と聞かれ、

「あの子、自動車部へ入っているから、何時死ぬか分からないので心配だわ」

と、意外な言葉が口から出てしまったのである、家の子に限ってそんな事は無いと信じていた筈なのに……。その言葉通りになってしまふなんて、これが予感というものだろうか。迷信に惑わされないと思っていた私が、ゾツとするものを感じた。息子が、あと数時間後に事故死になろうとは……。丁度私と娘が眠りについた頃、洋行は運命の道を辿っていたのである。

洋行達自動車部員は、車五台で大学を午後十時に出発し、ラリーの練習をして

いたのである。事故は午前零時四十五分に起こり、運転を誤った洋行は、川に転落、僅か水深五十センチで水死、私達と洋行の永遠の別れになってしまったのである。

## 真夜中の電話

遠くで鳴り続けている電話の音に目を覚まし、慌てて階段を降りる私の胸は、激しい動悸に見舞われ、事故の知らせではないかと、震える手で受話器を取った。

「井上洋行君のお宅ですか？」

「落ち着いて下さい、落ち着いて下さい！」

と言いながら、魚沼病院への道順を一所懸命知らせている学生の声が、耳の遠くで聞こえている。ハンマーで打ちのめされた様なショックを受け、上擦る声で、

「大丈夫ですか？」

と問いかけた。しかし学生がどう答えてくれたか、はっきり覚えていない。心臓は早鐘の如く鳴り出し、頭は錯乱し、奈落の底に落ちてゆく……。

タクシーの来る間、私は佐渡の実家に、小千谷の魚沼病院であることを知らせたが、今の時間、出港する船は無い筈である。心細さと、放心状態の中で、我が身に鞭打ちながら、洋行の事を案じていた。

車中、タクシーの運転手の温かい心遣いに触れながら、頭の中は様々な思いで乱れ狂っていた。手や足が無くなっててもいい、ただ、生きていて欲しいと願いながら、真暗闇の高速道路を突っ走る。時々、速度制限を知らせる「チンチン、チン」と鳴る音が無気味にさえ聞こえる中、じっと隣に座っている娘の無言の励ましを感じながら、手を合わせ、神に祈り、「洋行、頑張るのよ。もうすぐお母さんが行くからね」と何度も心の中で叫び、手術中の事迄考えていた。しかし、私が電話を受け取るずっと前に、洋行は私の手の届かぬ所へ行ってしまった。私達は、生きていて欲しいという心にすがっていたのである。

病院に着いたのは、午前四時過ぎであっただろうか。薄明かりの中で、数人の学生が、タクシーの到着を待っていてくれた。その学生の表情から、私は、洋行の死を素早く読み取ってしまったのである。私はまるで夢遊病者の様に病院の中へ吸い込まれるように入ってしまった。

## 美しい顔

看護婦さんが、私達を案内してくれたのは、遺体安置室であり、白い布を被せられた息子は、大勢の学生に見守られて中央のベッドに横たわっていた。仮りに作られた祭壇には、洋行が生前好んで飲んでいたポカリスエットが数本、誰が供えてくれたのだろうか……。

看護婦さんが白い布を取り上げた時、そこには、紛れもない洋行の静かな顔があった。しかし、涙にむせび、号泣する母と娘の姿はそこには無かった。人間は、

あまりにも驚いた時、一瞬、声も涙も出ないものだという事を初めて知ったのである。

ただ茫然と洋行の顔を、見据えていた私も、次第に現実に戻りつつある中で、両手で洋行の頬を撫で、自分の顔を重ねて、「嘘だ、嘘だ」と、心の中で叫び続けた。けれども既に奇跡は、期待出来ない程冷たくなっていたのである。それでも、じつと手を当てていた額の部分に、私の温もりが伝わったのか、生き返った様に暖かくなり、心持ち薄ピンクに変わった様な気がした。前髪の生え際が、うっすらと汗ばんで、少し口を開いて眠るいつもの顔、苦痛や、恐怖の影は少しもない。揺り動かせば目を覚ましてくれそうな美しい顔、私は狂った様に自分の顔を擦りつけた。

どんなに叫んでも無表情で、閉じた目は開かず、心持ち開いた口からは、もはやどのような声も洩れなかった。しかし、私には、「お母さん泣かないで、お母さんごめんなさい」そう言っているかの様に思えた。

## 無常に泣く

私と娘が、タクシーを飛ばしていた頃、佐渡では私の弟が、魚沼病院に電話を入れ、洋行の死を確認し、電話口で男泣きに泣いていたという。洋行を、自分の弟の様に可愛がっていたから無理もない。つい一カ月前の八月には、佐渡でお盆の花の配達を手伝い、忙しそうに飛び回っていたのに。あの姿や、「冗談を言つて皆を笑わせていたあの笑顔は、もう返って来ない。

あの美しい桜の花は、人に惜まれ、一瞬にして花吹雪と化す。命とは、そういうものなのだろうか。『平家物語』や、『方丈記』に書かれてあるように、世は無常である。すべてのものは、絶え間なく変化し続け、止まる事を知らない。無常であるからこそ、あらゆるものが生き生きと輝き、永久に変らぬものは空しいものである。



しかし私は今、無常に泣いている。年の順に亡くなるのが自然であり、これを順縁と呼ぶならば、逆縁の苦しみに身を断ち切られ、これ以上残酷な事はない。残された家族の悲しみも考えないで、享年二十一歳、花の盛りも知らず、ほころびかけたつぼみのままで逝ってしまうとは。

作家、丸岡秀子の『声は無けれど』に、「花は、繊細で非常に短い命ゆえに美しい。造花は、長い間もちますが、やはり誰しも、その手の中で枯れてゆく自然の花を好みます。この言葉は、逆縁も無常の中での変化にすぎないと、思い捨てることを教えていると、私には思えた。若さは、造花のように、けっしていつまでもそこにとどまっではないのだから」

私はこの文を、何度も読み返した。そして、作家、丸岡秀子が言う様に、洋行も短い命ゆえに、多くの友人達の心の中に入れていただくことが出来、二十一歳という命で逝った息子は、自然の花と同じく美しいのかも知れないと……。

## 無念の涙

洋行の顔に手を添えながら、泣き崩れていた私は、千鶴の心を案じる気持しさえ失っていた。まして時間の感覚等ある筈がない。窓から差し込んで来る薄明かりも、この世のものとも思われず、只、冷たい身体をさすりつつづけていた。

突然、ドアが開き、義理の妹が飛び込んで来た。偶然、新潟の実家にいたという彼女は、弟の知らせを受けて一番に駆け付けてくれたのである。身内の人に来てくれた、その安心感からか、新しい涙が込み上げてきて止まらない。

「ひろちゃん、ひろちゃん！」彼女の叫びが、小さな部屋に響きわたった。生き返って欲しい、どうしても生き返って欲しい、その思いが入道雲のように頭の中にもくもくと広がっていった。

死の知らせを受けて、高速道路をどんな思いでハンドルを握って駆けつけたの

か、主人が部屋に飛び込んできた。私の背後で、体の底から絞り出すような、うめくような低く、かすれた声を耳にしたのである。

「馬鹿だなあ……」

両手を握りしめ、体は震えていた。

新発田の米良さん夫婦が駆けつけてくれた時、主人の咽ぶような泣き声が私の胸を引き裂いた。押えていた涙が、そして声が、一気に噴き出したのだろう。

弟と私の母が駆けつけた時は、午前九時三十分を過ぎていた。廊下には、自動車部員の学生が悲しみに沈んでいた。一人の学生が私に、

「井上の友達を連れて来ました」

そう言われ、私は、そっと彼女の方を見た。個性的な顔をした、ミニスカートのこの女性に、

「洋行の友達でしたの。本当にどうも有難う」

それ以上は何も言えなかった。ただ涙が出て来るばかりであった。悲しみの冷

たい涙に交って、こんな女性がいてくれたのかと、ほのかに温かい涙がそこにあった。

皆が揃った頃医師が、私達に死因を告げられた。

「外傷はかすり傷程度で、死因は水死です」

その言葉が私の頭に焼きついて離れなかった。水深わずか五十センチで……。この無念さがあとと迄も私を苦しませたのである。

## 無言の帰宅

米良さんから、今後のすべての段取りをしていただき、葬儀場の車で洋行の無言の帰宅である。それは私にとって、何んと長くて辛い時間であつただろうか。いつもは、あの白い車で「ただいま」と元気に帰って来てくれたのに。洗濯物を紙袋にいっぱい詰めて「これ、おみやげ」と言ってくれたのに……。もうその姿

は見られない。命とは、こんなに儂いものなのか。

病院の外には学生達が並んでいた。涙を流している人、じっと堪えている人、声を出して泣いている人、皆同じ思いであった。お世話になった方々に、深く一礼して車に乗り込んだ。学生や、看護婦さんの姿が見えなくなった時、私は、洋行の動かしがたい死を改めて思い知らされたのである。

車に揺られながら、この時私は、魔法使いに毒りんごを食べさせられた『白雪姫』を思い出していた。車が振動する度に、何かの弾みで生き返るのではないかと、小さな望みを捨てられなかった。

数時間前、私と千鶴は洋行の事故を案じながら、手を合わせて夜の高速道路を走っていたのに、今は、腫れぼったい目を辛うじて開けて、洋行と共に無言の帰宅である。私達の悲しみをよそに、後続の車がアツというまに追い越していった。生前、洋行もこの高速道路を何度走って来た事であろうか。それなのに今は……。

車が静かに家の前に着いた時、私は洋行に語りかけた。

「洋行、ほら、お前が十二年間住んできた家に着きましたよ」  
折りしも庭の白いむくげの花が、洋行の死を悼むかのように二つ、三つ咲き始  
めていた。

## 白いヘルメット

病院を出る時、私は学生から白いヘルメットを渡された。その中には少し濡れ  
た赤いジャンパーと、汚れた白いズックが入っていた。そのヘルメットを幼い頃  
の洋行を抱くように、胸にしっかり抱いて帰宅したのであった。このヘルメット  
の中に、赤いジャンパーにそっと包まれた、数枚の写真が入っていたことを、祖  
母が見つけてくれる迄気が付かなかった。

この写真は、枝大の自動車部員が社会人の方達と、山古志村の金倉山へ行った  
時のものであり、新緑の爽やかな金倉山を背に、バーベキューを楽しんでいる一

コマであった。バックには、山草に混って薄ピンクの卵の花が色彩を添えていた。先輩達に混って、いつもの明るい、ひょうきんな洋行が何と嬉しそうに写っていることか。

何時だったか、洋行が赤い薄手のジャンパーを着て帰って来た時、私は「あれっ」と思っただけで見つめた。彼は生まれてから赤いものを着たことが殆どなかったからである。しかし色が白いで赤がよく似合っていた。そのジャンパーを洋行は大変気に入っていた様子である。

事故の時も、白いヘルメットに赤いジャンパー、そして紺のジーパンを身に着けていたのだった。このジャンパーは、昭和六十二年十一月三日に新潟大学で行われた市民ラリーに、先輩達と参加した時、戴いた記念のものである事を、後で聞いて知ったのである。洋行は私が心配するのを気遣って、ラリーの景品であることを黙っていたにちがいない。

白いヘルメットは、洋行が最後に身に着けていた大切な遺品として、祭壇の前

に何時迄も置くことにした。遺影の前に座る度、私はそつとヘルメットに目を落とした。このヘルメットを被り、シートベルトを着け、ハンドルを握る。その時の洋行の心は、ラリー練習に燃えていたにちがいない。ラリーへの夢は、洋行の青春の証であり、白いヘルメットからは、洋行の熱気が伝わってきた。

私はヘルメットに、そつと手を添え、時には胸に抱き、又或時は被つてもみた。洋行の匂いが私のこころを優しく包んでくれた。

## 友人に支えられ

仮の祭壇の作られた、客間の中央に寝かされた洋行は、何か言いたそうに軽く口を開け、眠っている様な静かな顔、とても死んでしまった者とは思えない程の、それは安らかな顔であった。それに引き替え私は、張り裂けるような胸の痛みで、血の気のない寒々とした氷山のような姿ではなかったのか。



隣人の方々や、親しくしていただいた方達の弔問が続くなかを、長岡技術科学大学の教務部長の千葉賢さんはじめ、東京大学名誉教授の朽津耕三さん、北海道大学名誉教授の半澤宏さんが、菅野昌義学長さんからのお悔やみの言葉を述べられた。大学側の多大なる誠意に対し、ただ感謝の気持ちでいっぱいであった。

しかし、どのような言葉も、愛する我が子を失った痛手を埋める事は出来なかった。逆縁の苦しみは、こんなに深いものであったのか。日が経ち、時間が経つたからといって、心が癒えるというものではない。益々、生前の我が子の、いろいろな仕草が思い出されて胸が詰まる。

夜も更け、中学の友人である奥田君、佐藤君が駆け付け、突然の事故死に言葉もなく、自分の目を疑い、茫然と見つめている中、次々と友人がお別れに来て下さった。特に南高校での親友、板垣君、剛君が来てくれた時は体中に電流が流れたような、激しい痛みを覚えた。洋行の顔に手を当てて、力一杯揺さぶり、涙も拭かず泣いてくれた剛君の姿は、生涯忘れられない。次々に来て下さる友人を見

ながら、

「洋行、お前は本当に素晴らしい友達を沢山持ちましたね。友人のこの涙が見えま  
すか……」

心の中でそう眩いていた。

夜も深く、次第に静まりかえって行く中で、ろうそくの炎と線香の煙だけが、  
絶える事なく悲しみを更に深くしていった。

## 美しき髪

一睡もせぬうちに九月十五日となり、事故発生からまる一日が経った。二十四  
時間前、洋行が死の直前にあつた時、私と千鶴は何も知らないで眠りについてい  
たとは……。もしあの時、私が現場に居合わせていたら、反狂乱になって助け出  
そうとしたであろう。親として何もしてあげられなかった事が悔しくてならない。

事故の一瞬、この子は何を考えたであろうか。家族の事が、友人の事が、それとも何も考える暇がなかったのだろうか。様々な事を考えながら、洋行の顔をじっと見つめていると、二十一年間の楽しかった思い出が、走馬燈の如く頭の中を駆けめぐる。

東の空が、ほのぼのと明け始める頃、外はいつもと変わらない、心持ち肌寒い初秋の朝であった。九州や、東京からの長旅の疲れの為か、親戚の人達はまだ眠っている。真直ぐに立ちのぼるろうそくの炎と線香の煙の中で、「コチ、コチ、コチ」と時計の音だけが聞こえている。その中で私は、棺の中に入れてあげるものを選んでいった。

「カセットテープや、車の本、そして洋行のお気に入りの洋服も沢山入れて置きますからね、櫛も入れておきますよ」

「赤いジャンパーと、あの時履いていた白いズックも、きれいに洗って入れて置きましょうね」

「あつ、そうそう、友人から戴いたクッションと布製の袋も忘れずに入れなくては……」。

「一人で天国に行くのは心細いでしょうねえ。今年作ったばかりのまりかちゃんのお人形を、お母さんだと思つて一緒に天国へ連れて行つてね。そのうち私もきつと行くから待つててね」

氷の様な冷たい顔に、熱い涙がしたたり落ちた。洋行のこの安らかな顔を、すっかりと脳裏に収めながら、黒々とした、艶のある髪を少しだけ切り取り、細くて小さなグリーンのリボンでしっかりと結んだ。そしてお香の入っていた小さな箱の中にそつと入れて、私のハンドバッグの中に収めた。体は硬直していても、髪だけは生前と全く同じく、サラサラとして不思議なくらい光沢を帯びていた。

## 薄化粧

九月十五日、午後七時から始まる通夜に備え、生きている様なサラサラした黒髪に櫛を入れた。洋行の髪をとかしてあげたのは確か小学生の低学年頃迄であつただろうか。その後は自分でとかし、ドライヤーでセットし、鏡とにらめっこするくらい迄成長したのに……。学生服に身を包み、通学していたあの頃が、思い出されて仕方がない。

うつすらと頬紅をさし、口紅を塗る私の手が小刻みに震えた。薄化粧を終えた洋行の顔はまるで生きている様な、温かみのある優しい生前の顔になっていた。底知れない私の悲嘆等考えてもいない様に……。

「洋行、お前は今晚、最高の美しい顔でお友達とお別れをして下さいね。この世のものとも思えない安らかな顔で」

白菊の花を顔の囲りに並べながら、私は心の中でそう語りかけた。普通であれば私がこの支度をしてもらい、送り出してもらおうのが世の常である筈なのに。ここでも又私は逆縁の苦しみを味わねばならなかった。塗りたての淡いピンクの口びるが、

「お母さん、ありがとう」と言っている様な気がした。

葬儀場に到着した私達は、立派に飾られた祭壇の前に棺を置き、改めて遺影の中の洋行を見つめていた。この場に及んでも我が子の死が信じられない。大学側、大学同期生、自動車部、自動車部OB会、友人、そして銀行側からの花輪があげられ、祭壇には生花や果物籠が沢山供えられていた。それは生前の洋行が良き師、良き先輩、そしてOBの方達や友人に恵まれ幸せだった事を物語っているようで、流れる涙をどうする事も出来なかった。

私と同様、洋行の閉じられた筈の目から、筋の様な涙が拭いても拭いても流れ出るのは何故だろう。或る人に、

「皆さんが来てくれて嬉しい時、亡くなった人は涙を流して喜ぶのですよ」と言われた。そうかも知れない。たとえ医学的にはそうでなくても今の私はそう思いたかった。

## 懐かしき顔

二百名以上の焼香人で予定より少し遅れて通夜が始まった。厳粛な儀式の中で、ご住職さんの素晴らしい法話に耳を傾けながら、そつと重い目で遺影を見上げると、微笑んでいる洋行の目が、心なしか潤んで見えた。

法話の中で洋行の名前を二字そのまま取って、法名を釈シヤク洋ヨウ行キョウと決めたことを話された。あの子は釈洋行という仏様になってしまったけれど、私の心の中では、今迄通りの洋行として生前以上に鮮やかに生き続けていくだろう。宙に浮いた様な体をやつと支えて、次々と襲ってくる心の痛みを辛うじて押え、

少しでも多くの方々の顔を拝見しようとしてとめた。洋行は勿論の事、私にとっても、なんと懐かしい方々がいらっしやって下さったことか。

中学三年担任である板垣先生や、卓球部顧問の福地先生、そして南高校二年担任の森先生、三年担任の安達先生のお姿を拝見し、感謝の気持ちでいっぱいであった。高校受験、大学受験と、それぞれに於てご指導下さった先生方、それなのにきょうは、悲しみの別れの日になるうとは……。これを運命と呼ぶならば、神を恨みたくなる。「神様は、意地悪よ」何時だったか千鶴が、私に小さな声で言った言葉を思い出した。

悲しみの焼香の列は、まだ続いていた。これ程沢山の方々が来て下さるなんて、なんと幸せな子であろう。

「洋行、通夜に来て下さった方達と、最後のお別れを心行く迄して下さいね。懐かしい友人達も沢山来て下さいましたね」

生花に囲れた遺影を見つめながら、心の中で語りかけた。



## 或る友情

夜も更け、皆さんが帰られた後、自動車部員の方達から生前の洋行の思い出話を聞き、私の知らなかった別の面を垣間見た気がした。家では我侂だと思っていたあの子が、こんなにも友人に恵まれ、先輩やOBの方達に大変可愛いがついていたとは、有難いことである。

殆ど三晩の徹夜ともなると、気は張ってはいるものの、さすがに若い人達にはかなわなかった。頭は朦朧とし、体がふらふらした。告別式に倒れない様に少し休むように言われたが、とても眠れる筈がなかった。常に頭の中は、缶詰の様に洋行がぎっしりと詰まっていた。

十六日、午前二時半頃、OBの一人である西田さんが、仕事を終えて大阪から駆けつけて下さった友情に、目頭が熱くなった。なかなか出来るものではないこ

の温かい心に、頭の下る思いであった。がっしりとした体のすべてに、温和な優しい心がみなぎっているような人であった。生前、西田さんには、運転の仕方、テクニク、技術等指導していただいたとの事、彼の姿を見て、あの子はどんなにか喜んだことだろう。

短くて、はかない二十一年間の生涯ではあったが、誠に充実した人生の縮図の様な生き方であった事が、せめてもの慰めであった。棺の前に座り、洋行の顔をじっと見つめていると、二十一年前、爽やかな緑の五月に生まれたあの日の事が思い出されて仕方がなかった。

その時、今迄気付かなかった一枚の写真が棺の中に見つけた。どなたが何時、入れてくれたのであろうか。それは高校二年の時、ハイキングで出かけた尾瀬の風景写真で、写真の下に、一九八四年と記されているのが今はとても悲しい。顔を上気させ、輝く目で尾瀬の美しさを私に語って聞かせてくれたのに……。洋行はそれ程尾瀬を愛していたのか。

## 白い鳩と共に

九月十六日、午前十時よりしめやかに告別式が行われた。悲嘆に沈む私の耳に、親友である嶋陽二郎君の弔辞が聞こえてきた。静寂の中に、何処からともなく、すすり泣く声がし、堪え切れない涙が後に続いた。私と洋行は死によつて完全に引き裂かれ、数時間後には、悲しみの極限を味わなければならなかった。頭の中は、迷路の如く入り乱れ、遺族席にやつとの思いで座っている私は、生とは名ばかりの冷たい石の様な姿ではなかったのか。

私は白菊の一輪を、洋行の耳元にそつと置き、じつと見据えていた。これが我が子を見る最後の時なのか、死と生は、ここではつきり永遠の別れをしなければならぬ。もう二度と涙の筋を、拭いてあげる事も出来ない。私の生は、洋行の死と同時に、生きた化石の様なものであった。

献花の続く中、洋行の親友である板垣君が、

「これを井上の棺の中に……。」

と言つて紙袋を差し出した。この場に於て、これ程嬉しい事はない。彼の童顔が涙でかすんで見えた。私自身も、告別式の始まる直前に学生から手渡された、薄紫色の風呂敷包みを大切に抱いていた。この中には、洋行が最後に身に付けていたTシャツや、ジーンズ等が入っていたのである。

長い献花の列で、沢山の花に埋もれながら、天国への旅立ちの儀式をすべて終えようとしていた。洋行の顔は、この世では見られない聖者の顔そのものであった。

葬儀場の前では、沢山の方々が整然と立っていられ、その中を天国への使者をつとめるかの様に、白い数羽の鳩が、一斉に大空高く舞い上がった事は、後から聞かされる迄、私は全く気が付かなかった。白い鳩に守られて、あの子は無言の別れを告げながら、天国に向かって旅立ったのだろうか……。

## 胸に抱かれて

最後の場所に来て、私は、自動車部員の親友でかつ先輩のあの泣き叫ぶ声を耳にした。洋行との最後の別れに心から男泣きに泣いてくれた彼のあの声は、洋行の耳に届いたことであろう。そして私の絶叫と号泣。母親であればこそ、反狂乱になるのは当然で、それが人の偽らない真の姿ではなからうか。

迷った挙げ句、私は千鶴を引き止め、あの場所へはどうしても行けなかった。思春期の感じやすい年頃の上、神經過敏な娘に、ショックを与えなくなかったからであった。私が洋行の年齢の頃、祖父を亡くしてから、死への恐怖を抱いていたからでもある。又それ以上に千鶴と私にとって、洋行との最後の別れを、あの沢山の花に囲れた安らかな顔、姿としていつまでも脳裏に収めておきたかったからでもあった。

そして数時間後、まだ温かみの残った、ズッシリとした重さで、あの子は私の胸にしっかりと抱かれた。何処へ行くにも、だっこしてあげた幼児の頃を思い出しながら、これですべてが終わったことを知り、体中から力がぬけていった。

生まれた時から、背負っていた運命だとしたら、あの子を産むのではなかった。逆縁の悲しみ程、苦しいものはない。その極限を味わってしまった私の体は、まるで空洞そのものであった。

洋行は、私にしっかりと抱かれて、再び我が家の祭壇の中央に置かれた。白菊や白ユリの花に囲まれた遺影を見つめていると、目まぐるしく行われたすべての儀式が、まるで大きなドラマを演じてきた後の様な錯覚すらした。今にでも「ただいま」と言っただけ帰って来そうなの、そんな気がしてならなかった。

## 小さな虫

洋行が亡くなってからというもの、私達家族にちよつとした小さな異変が起つた。告別式を終えて自宅に帰った我が家に、何処からか小さな虫が入ってきた。「ほら、洋行君が虫になって帰ってきたんだよ」

親戚の方のその一言が、私達の心の奥底に響いた。今迄、虫といえば紙でそつと捕まえて、外に捨てていたのに。どんな虫が入ってきてても、それが洋行に思われて、紙でポイツという気持ちにはなれなくなった。

「お母さん、お兄ちゃんが虫になって帰って来たよ！」虫を見つけると千鶴はそう叫んで、虫から目を離さなかった。以前は、虫をあんなに怖がっていたのに。

どんな小さな虫にでも、たった一つの小さな生命いのちがある。その小さな生命で懸命に生きようとしている姿は、やはり美しい。生命の尊さを知った私達は、虫を

も大切にする優しい心になっていた。虫を見つけると、洋行が帰って来てくれたように思われて、嬉しかった。

何時の日だったか朝起きて見たら、小さな虫が動かなくなっていた。やわらかいティッシュに包み、記念樹の桜の木の横にそっと埋めてあげた。乾いた土の上に、熱い涙の雫がまた落ちた。

## 車のわだち

事故の詳しい状況も知らぬまま、十七日には事故現場と大学へ行くことになっていた。高速道路で小千谷インターを降りると、すでに学生の車が二台待っていて、私達を現場へと案内して下さった。

山を登り始めた時、我が子の命を奪った、憎い野辺川が見えて来た。私は、まるで敵を睨み据える様に、この川を恨めしさと、憎しみの思いで見つめていた。



この川さえなかったら、せめて水が流れていなかったら、そう考えていた時、いくつかのカーブを曲がって学生の車が止まった。

「ここが現場なのか……」

私の心臓は、ドキドキ鳴り出し、何とも言えぬ緊張感に見舞われ、一瞬、足がすくむ思いがした。現場に早くお花を供えたいという気持ちと、現場を見る辛さとが入り混っていた。

右カーブを曲がり切れず、川に突っ込む形で落ちたらしい車のわだちが残っていた。その車のわだちを、私は右に曲げてあげたかった。そしたら、あの子は川に転落しなかったであろう。複雑な心境の中で、私は吸い込まれる様にそのわだちに沿って川に飛び込みたい衝動にかられた。

S字型のこの現場は、夜は特に危険な場所で、前方に道が続いている様な錯覚を起こすらしい。砂利道の上に夜でもあり、慎重に運転しなければとても危ない場所であった。一つ運転を誤れば、川に転落死する様な場所で何故練習をしたの

であろう。どんなに悔やんでも、洋行はもう帰って来ない。

現場には、すでに学生達によって、お花と洋行の好物が供えられていた。ろうそくの炎と線香の煙が山の中に吸い込まれ、川は何事もなかったかの様に静かに流れていた。私は無念の涙を拭こうともせず、じっとその川を見つめていた。

もうほんの十数メートル手前だったら、田んぼであったのに、ああ、せめて木が一本生えていてくれたら、衝撃を少しでも和らげてくれた筈なのに……。ガツチリとした二重のシートベルトで脱出できなかったのか、それとも気絶してしまったのか、いずれにせよ苦しんだあとは微塵もなく、眠っている様な姿であった。二十一歳の若い命が、こんなにも儚く消えてしまうものであるとは、全く信じられなく、今だに悪夢の中にいる様な私であった。野草に混じって、一本の野菊の花が固い蕾をつけていた。

## ポーカレ

後髪を引かれる思いで現場を去り、大学の自動車部、部室前に着いた時、洋行の愛した車には、真新しいシートが被さっていた。車の上部が押しつぶされ無残な姿をしていた。しかし、部員達が大学祭を返上して磨いて下さった洋行の車は、初秋の太陽を反射してキラリと輝いていた。座席には、すでに白菊や白ユリの花が供えられ、車の前には、ろうそくや線香、お菓子等も供えられていた。部員達の心遣いと友情に胸が熱くなる思いがし、感謝の気持ちでいっぱいであった。こんな素晴らしい友を持った洋行は、何と幸せな子であつたらう。短かった一年半の大学生活の中で、あの子が得たものは数え切れない程多かつたにちがいない。折りしも大学構内では、十七、十八日と開かれる大学祭が、盛大に行われている。教務部長さんに、洋行が在学中に属していた材料開発部での教室を見せてい

ただいた時、生きていたならば、この教室で……。そう思うと胸がしめつけられる思いがした。構内を楽しそうに歩いている学生の姿を見るにつけ、無念の涙が体の底から泉の様に沸き出てきて辛かった。

私達は、部員達と一緒に、洋行が事故の日、先輩達と夕食をとった田中食堂で昼食を共にすることにした。最後の夕食に、あの子はポークカレーを食べたという。そして数時間後に事故死になろうとは、誰が想像したであろうか。まさしく世は無常である。又逆縁の苦しみが私を襲ってきた。ポークカレーを美味しそうに食べている学生達の姿を見ると、生きる望みを断ち切られた様な激しい痛みを覚えた。洋行も又、この学生達のように美味しそうにポークカレーを食べたのだろうか……。

## 思い出のコーポアルファ

九月二十五日、洋行が十カ月余り過ごした思い出のコーポアルファからの引越しの日であった。白い外壁の新築したばかりのこのアパートを見つけて、喜んでいたあの時の洋行の顔が目には浮かぶ。私は三度程、このアパートへ来たことがあった。見るものすべて懐かしく、洋行の生活の匂いがして荷物を整理する気にはとてもなれなかった。窓際には、私が持たせた観葉植物ベンジャミンが、小さな緑の葉をいっぱい付けていた。傍らで千鶴が私に話し掛けた。

「これ、私がお兄ちゃんに買ってあげた所ジョージの小物入れ、喜んでくれたのになあー」

「そうだったねえ……」

春休みに、デイズニーランドへ行き、原宿の竹下通りで洋行に買って来てあげ

たお土産であった。あの頃は幸せであった。何といつてもあの子が生きていたのだから。

ベッド、洗濯機、机、整理筆筒、台所用品、洋服等、胸が詰まる思いであった。特に洋行が大切にしていたシンセサイザーや、ラジカセは、主人を失って淋しそうであった。又、天体に興味のある洋行に私がこっそり買ってあげた望遠鏡が、ボックスの上に置かれていた。小学六年頃であったろうか、私と二人である子の部屋の窓から、星を眺めていたのは……。

すべてが懐かしく思い出された。いつたいあの子は何処へ行ってしまったのだろう。死後の世界があるとしたら、あの子に会いに行けるのに。私達家族に何も言わないで、アツという間に逝ってしまった。残された家族の深い悲しみを、洋行は天国からどんな気持ちで見つめているのだろうか。そんな事を考えながら、ダンボールの中に荷物を入れ、手伝って下さった数人の学生達によって、荷物は車に詰め込まれた、宮本さんら女性の方によって、部屋は一段ときれいに片づい

た。

家具や、調度品は洋行の形見として学生達に使っていただくことにした。外は引越しを哀れむかの様に、しとしとと雨が降り続き、その白い外壁のアパートは、雨に濡れて一際美しく見えた。洋行が生前、自分の小さなお城として生活していたこの家とも、きょうでお別れ。

## 一人になって

私がつた一人になれたのは、九月二十日の初七日を済ませた次の日からであった、誰にも遠慮する事なく、静かに洋行の事を考え、思い切り泣くことも出来た。

不安定な精神状態の中で、どっと押し寄せる悲しみに打ちのめされ、いつその事死んでしまった方がどんなに楽であろうと、何度も思った。しかしそんな馬鹿

な事が出来る筈もなかった。せめて娘にだけは、母親としての強さを見せねばと思ひ、出来るだけ明るく振る舞う様に努力し、涙も隠してきた。しかし誰もいない時に思い切り泣きはらした私の目は腫れぼったく、千鶴は私のすべてを読み取る事が出来た筈である。どんなに我慢しても押え切れない涙が二人の目に溢れた時は、

「お兄ちゃんが、天国から見ているから頑張ろうね」

「お兄ちゃんが、悲しむから泣かないで」

と言つて励まし合つてきた。この涙が枯れ果てる日があるとしたら、それはきつと私が天国である子と会えた時ではなからうか。

朝、目を覚ますと、とたんに洋行が私の心の中で動き出し、一日中私を占領していた。生前の洋行の、ほんの小さなしぐさ迄が、これ程鮮やかに思い出されるのは、あの子が私の心の中で生き続けている証ではあるまいか。生前は顔を見ない日や、声を聞かない日が多く、時々、



「今頃は、何をしているのかなあ、食事は満足にとつているだろうか。睡眠不足で体をこわさなければよいが」程度に考えていたのに、亡くなってからは毎日あの子の良い所ばかりが思い出されて胸がしめつけられる。

死の悲しみをよそに、ソウルオリンピックが開催され、テレビを賑わしていたが、勿論私の頭には、テレビを見たり新聞や本を読む気持ちは全くなかった。頭の中には、洋行の死のショックで完全にパニック状態であった。

しかし人の心も無常である。少しづつ頭の中を整理しはじめてきた時、何故、事故が起きてしまったのか、それを知りたい気持ちが泉の様に沸き上がってきたのである。

## 心の迷い

事故については、新聞と一部の学生の話以外、詳しい事情は全く分からなかった

た。何故事故は起きたのか、ハンドル操作を誤ったのは確實であつたとしても、それには何か原因があつたのではないだろうか。もし事故プラスアルファがあつたとしたら等、サスペンシ的な事を色々と考えた時であつた。

運悪く運転席側が、水につかる様な形で落ちたとしても水深五十センチで水死とは……。しかし助手席に乗っていた学生が、かすり傷程度で助かつた事が私達のせめてもの救いであつた。洋行も、水さえ飲まなければかすり傷程度であつたのに。

この頃から私の心の中に少しづつ、悪魔の心が住みつきはじめたのである。悪路走行練習に怒りを感じたり、二年連続優勝に有頂天になりすぎて過度な練習をしていたのではないか、健康チェックはしていたのだろうか、何故、車にロールバーを取り付けて練習してくれなかつたのか等が、今更ながら悔まれた。悲しい事に、事故が起きてから、安全確保に乗りだすのが人の常である。数人の友人の話によると、ラリー練習の二三日前から、洋行は体調を崩していたらしい。あん

なに好きなラリー練習に「行きたくないなあ」と漏らしていたことが分かった。それから考えても、大分体の調子が悪かったにちがいない。しかし、新人特訓の練習とあつて、自分の責任を果たす為に、無理して参加したのであるうか、。

悪魔の囁きは日ごとに増し、何故洋行だけがこんな目に合わなければならなかったのかと人を恨み、憎悪の気持ちで一杯になった時もあった、今迄見たくなかった交通事故死の欄を荘然と眺めながら、他人が不幸になると自分の気持ちを理解してくれる仲間が又一人増えた様な気分になったのである。これは、まさに狂気に近い醜い心のなにもでもなかった。

心の迷いは、そう簡単には消えそうもなく、私の心の葛藤が続いた。無念の思いが私の心を益々狂わせ、我が子の死を他人のせいにしてしようとする醜い悪魔の様な心が、根強く居座ってしまったのであった。この頃の私には、友人や知人の温かい慰めも、すべてが空しく感じられ、どんな言葉も我が子を失った極限の悲しみを、埋める事は出来なかったのである。

## 揺れる心

半月程経った頃から、私は次第に人目を避ける様になって来ていた。知人に出会った時、洋行の死を涙で訴えたい気持ちと、逆に逃げ隠れたい気持ちとが交錯して、複雑な心境であつた。

可哀相な弱者だと見られる事で、まるで蟻の様に小さくなっていく自分が無残であつた。日増しに、世問の人が煩わしく感じられる様になつてきたのである。

歯を食いしばり、涙を隠して、出来るだけ人に会わない時間を選んで、外出した。最初は素直に、知人からの慰めの言葉を受け入れる事が出来た筈なのに、次第にひねくれた気持ちになつてきたのである。それは私があまりにも神経過敏になつてきた事を意味していた。慰めの言葉の一つ一つに、私の心は和らぎもしたが或時は逆に苦痛を感じる時さえあつた。

私もかつて、不幸を味わった人達に、月並の慰めの言葉をかけてきた。しかし、  
どれだけ相手の心の痛手を理解してあげたであろうか。今初めて、不幸を経験し  
てみて分かったのである。どんな言葉も、愛する者を失った心の痛みを、完全  
に理める事は出来ないということ……。

悲しみは、時間が解決してくれると人は言うが、胸が張り裂ける様な辛い逆縁  
の悲しみを味わった私にとっては、時間が解決してくれる等という生易しいもの  
ではなかった。時間が経てば経つ程、二十一年間の思い出が頭の中を<sup>よ</sup>過ぎり、悲  
しみは増すばかりであった。

私の心の様に、揺れ動くろうそくの炎と線香の前で、遺影を見つめている私の  
心は、冷たくひえ切っていた。洋行の死を運命と呼ぶならば、神様は大変な意地  
悪だ。二十一歳の若い命の変りに、何故私の命をお取りになって下さらなかった  
のですか。

## 遺品

部屋の片隅に積まれた、アパートから持って来たダンボールの整理は、とても辛く悲しい仕事であった。台所用品の一つ一つを見ても、我が子の匂いがして息が詰まる思いがした。

「ああ、この食器はついこの間、紙袋に入れて持たせてあげたばかりなのに……」  
炊飯器、トースター、鍋、コップ等々、皆懐かしいものばかりであった。それらは洋行の遺品として、特に大切に私がそのまま引き続き使う事にした。

衣類の入ったタンボールの中身は、特に思い出の多い物ばかりだった。洋行が好んでよく着ていたスポーツシャツ、Ｔシャツ、トレーナー、セーター、ズボン等、一つ一つを手に取り頬に当てながら、生前の姿を思い出していた。あの子は、時々私にアイロンのかけかたに注文をつけた事があったのに。それも皆悲しい思

い出の一つとなってしまうとは……。

衣類はすべて洋行が何時帰って来てもすぐ着れる様にと、洗濯をし、丁寧にアイロンがけもし、ナフタリンを入れて収納した。勿論、取れたボタンは涙で曇った目でしっかりと取り付けた。何時の日か、ひよっこり現れて着てくれる事を願いながら。

紺地に小さい模様の入ったネクタイは、一年半前の大学の入学式と、亡くなった年の成人式のたった二度だけ結んだ、懐かしい遺品である。照れくさそうに着ていた背広姿の洋行と、それを満足気に見ていた私の姿が鮮やかに甦ってきた。靴やズックはすべて大切な遺品として取って置くことにした。あの子の部屋に入ると、きれいに整理された遺品や、高校迄使っていた机、生前読んでいた本、そしてあの子がカタログ販売で買った安楽椅子。その椅子にもたれながら好きな音楽を聞いたり、本を読んでいた姿が目の前にちらちらして来る。

まだ心のどこかで、洋行の死が信じられなかった。姿、形は無くても、洋行は

鮮明に私の心の中で生き続けている。机の上のりんどうの花が、私をまるで哀れんでいるかの様に見えた。

## 八月に戻りたい

或る日、千鶴が遺影の前で私にポツリとこう言ったのである。

「八月に戻りたい」

と。八月は洋行が元気で生きていた頃であった。娘も又、小さな胸を痛めていたのか……。

洋行が亡くなる一カ月前の八月は、例年通り私は子供達二人と、佐渡でお盆の手伝いをしていた。生花店を営んでいる実家は、お盆は特に猫の手も貸りたい程の忙しさであった。

私と千鶴は市場、洋行は得意先への花の配達であった。特にこの夏は、洋行に



とって車での配達が多く、事故を起こさなければよいがと、心配は尽きなかった。半袖のＴシャツを肩まで捲り上げて、汗を拭き拭き働いていた洋行の姿が、目の前にはつきり浮かび上がる。あの時は幸せであったのに。私だって、出来たら八月に戻りたい。タイムトンネルをくぐって、過去の世界に戻れたら、思い切りあの子とおしゃべりし、穴のあく迄あの子の姿を見てこよう。

特に千鶴にとつて、この八月は洋行と話す機会が多かつたらしく、八月の思い出が千鶴の頭の中に、ズツシリと詰まっていたのであろう。

八月十五日は、私のクラス会があり、洋行の運転で集合場所迄送ってもらったのである。その夜、私が帰る迄千鶴は寝ながら、洋行と色々な話をしたと言う。

「お兄ちゃんが怖い話をしてやろうかと言って、色々な話をしてくれて、面白かったなあ……」

と思ひ出す様に話す。

私と千鶴の心は、今一つとなつて遺影を見つめながら、「八月に戻りたい」と心

の中で叫んでいた。今でも学校から帰ると、この言葉を繰り返している。この言葉は、千鶴の心から一生消え去る事なく、天国にいる洋行に向かって叫び続けることだろう。

## 青春のビデオ

十月十六日、自動車部員の板橋君、河西君ら六人の学生が、八月に宇都宮で開催された、第二十七回関東甲信越学生自動車連盟競技大会でのビデオを、持って来て下さった。二年連続総合優勝に輝いた長岡技術科学大学自動車部の活躍振りが、きれいに撮れていた。

デイルリー、ナイトラリー、ダートトライアルの三種目のうち、洋行はデイルリーとダートトライアルに参加していた。出場前のリラックスしたひょうきんな姿に比べ、デイルリー発車寸前では、緊張感が顔が少しこわばっていた。ストツ

プウォッチを首から下げてハンドルを握っていた洋行のありし日の姿、ダートトライアルでは、ゼッケン二十三番を付けて健闘していた姿に胸がいっぱいになった。

このような洋行の姿を、私はビデオで初めて見たのであった、私に心配掛けさせないようにと、一度もラリーの練習をしていた事を話さなかった。交通事故をそんなに心配していた私にとって、練習中の事故死は大きな落とし穴であり、母親失格であった事が悔まれた。

毎日、日が西の空に沈む頃、私の淋しさは募り、洋行に無性に会いたくなる。そんな時、ビデオは私の心の助け船になってくれた。人はよく「ビデオを見ると尚、辛くなるんじゃないの」と言われる。確かにそうとも言えた、しかし今の私にとっては、唯一の動きのある洋行の生前の自然な姿であった。しかも、ほんのちよっぴりではあるが、あの子の口から「ヨーシ」という言葉が聞こえた。

青春をラリーに賭けた洋行の真剣な運転姿を見ていると、遂、私迄が画面に吸

い込まれ、洋行と一体となってハンドルを握っている錯覚に陥る事がある。

運転の出来ない私にとって、ラリー等過激なスポーツは嫌いであった。しかし、人の心は不思議なもので、私は洋行の死によって、自動車部を理解出来るようになり、男のラリーへの憧れが納得出来るようになっていた。

偶然とはいえ、このビデオには洋行が数多く、はつきりと写っていた。その場面を、スローで見たり、一コマ、一コマ送っては、食い入るように見つめていた。今にして思えば、自分の一番愛した車と共に、男のロマンであるラリー練習中に逝った事は、幸せなのかも知れない。

## 秋晴れの四十九日

多忙の中を時間を割いては、線香をあげに来て下さったり、兄を失った千鶴の為に、高校の学園祭迄見に来て下さったり、技大生の温かい心に支えられながら、

私達家族は悲しみのうちにも一日一日が過ぎていった。

そして十一月一日の四十九日は、この季節には珍しい秋晴れの暖かい一日であった。午前十一時から法要が営まれ、その後は予定していた通り、小千谷の現場でもお経を讀んでいた。技大からは、波多野君、横山君そして南高の友人である板垣君が来て下さった。雲一つない青空の下、高速道路を四台の車はひた走り、現場に到着したのは午後二時頃であった。

この小さな小千谷の山は、何事もなかったかの様に静まりかえっていた。その静寂の中で、川の流れと時折り囀る鳥の声だけが聞こえていた。紅葉も終わり、冬仕度に身を包んだ山の木々が、秋晴れの青空に戸惑っているかの様に感じられる中を、読経の音が静かに響きわたっていた。何度来ても、現場を見る度に無念の涙が体の底から込み上げてきて止まらなかった。

現場には、自動車部員達が駆けつけて合掌して下さった。これで洋行も、安らかに眠る事が出来るであろう。ろうそくの炎と線香の煙が、この小千谷の山あい

に、吸い込まれていった。もうすぐこの山も、雪一色に包まれ、長い冬が訪れることだろう。

## 洋行の夢

十二月二十二日は、洋行の百日目の日であった。辛くて悲しい日が百日続いた事になる。しかし今もあの子が、長岡のアパートから元気に大学に通っている様な気がしてならなかった。

その時、玄関のチャイムが鳴った。親友の嶋陽二郎君であった。百日目をちゃんと覚えていて駆けつけてくれたとは、私の顔に笑顔が戻っていた。今日で試験が終わり、明日から冬休みに入るといふ、二時間しか眠っていないという彼は、実家から送られてきたというＬＬサイズの和歌山ミカンを、洋行に供えて下さった。

何時だったか、洋行と一緒に我が家に来てくれた彼とは、夕食を共にした事があつたが、和やかで、口数の少ない彼は、洋行と気が合つたらしい。

その嶋君と夏休みに北海道旅行に行きたがつていた洋行。しかし、フェリーの切符が取れなかつた事と、金欠病が重なりその夢も果たさず、洋行は遠い所へ旅立つてしまった。あの時、無理してでも北海道旅行にやらせてあげればよかつたと、後悔するばかりであつた。

明日ありと思ふ心のあだ桜

夜半にあらしの吹かぬものは

という歌が思い出された。高校時代から、洋行は何故か北海道に憧れていた。特にあの幻想的な雪祭を見たかつたようである。

もう一つの夢は、嶋君の実家である兵庫県へ行く事だつた。

「ことは二人で、僕の実家へ行く事になつていたのに……」

彼がポツリと私に話してくれた。この二つの夢は、何時かきつとかなえてあげ

たい。

もう一つ、こんな大きな夢があった。亡くなる二ヶ月位前の頃だった。

「俺、将来、脱税して何かでつかい仕事をして、親孝行するよ」

「あれ、脱税でなくて脱サラでしょ」

「あつ、そうだった。アツハツハツハツ、ハツハツハツハツ……」

ひっくりかえって、足をバタバタさせて転げまわって笑っていた洋行。そう言えば、昔から、そそっかしい子であった。あまりにも可笑しくて、二人で涙が出るくらい笑った事があった。

## 雪の足跡

十二月二十三日、学校が休みになった娘と二人で、高速バスを利用して小千谷迄行ってこようと思いたった。



雪の多い小千谷の現場は、雪解けも遅く、三月下旬頃になるだろう。その前にもう一度花を供えて来たかったのである。初めて乗った高速バスで長岡に着いた私達は、そこから電車で小千谷へと向かった。小千谷に近づくに連れて、うっすらと積もった雪が窓を通して見えはじめてきた。平地でこの位なら、山はどんなに積もっている事だろう。しかし今更、引つ返す訳にはいかなかった。何としても現場に辿り着きたい。行ける所迄行こうと心に決めていた。

魚沼タクシーで現場に向かった私達は、山の入り口迄来た時、現場迄はとも車で行けない事を知った。

「お客さん、もう此処から先は車が走れませんよ、諦めて下さいな」と言われるものと思っていたのに、

「お客さん、車を此処に置いて歩いて現場迄行きましょう。私が長靴で道をつけてあげますから、私の足跡に着いて来て下さい」

と言う温かい言葉だった。この場に於てこれ程嬉しい事はなかった。この様な心

の温かい親切な方に、小千谷でお会いする事が出来たのも、洋行が私達に残して行ってくれた新しい出会いであったのか。

運転席の左側に、北原武と書いてあった。この名前をしっかりと頭に刻みながら、長靴の足跡の上をしっかりと伝わって歩いて行った。三人の足跡は一つとなつて長く続いていった。

新潟は全くの雪無しで良い天気であり、長岡も雪が無いとのことで、千鶴は短い靴、そして私もハイヒール姿であった。何度かヒールが雪に埋もれ、手で靴を引き抜かねばならなかった。足が冷たくなるのが当然である筈なのに、不思議な事に二人とも全く冷たく感じなかった。それはきつと、運転手さんの温かい心が、二人の足を温かく包んでくれたからではないだろうか。

現場に着いた時は、体中がほかほか温かく、私の心も爽やかであった。折りからの太陽の日差しをあびて現場の雪は、きらきら輝き、辺りは静まりかえっていた。雪の上に花束を差して合掌していると、あの日が思い出され、涙の滴が白菊

の上に落ちていった。私は雪の上に人差し指で大きく「井上洋行」と書いて現場を後にした。

運転手さんとの出会いがなかったら、二人は現場迄とても行けなかった。車中、「ああ、来て良かった」という思いで、娘と目を合わせ微笑んだ。極限の苦しみを味わった私にとって、人の情け程、心の痛手を救ってくれるものはなかった。

### 長岡と聞くだけで

長岡と聞くだけで、又長岡の二文字を見るだけで私の心は痛み、胸がしめつけられる様な気分に襲われた。小千谷という言葉も同様であった。気にすればする程、その二つの言葉は、前後左右から、まるで私を追い掛けるかの様に襲ってきた。

平成元年となり、大学受験生が東西南北を奔走する、いつもの受験戦争のシー

ズンとなった。平成元年二月二十八日、長岡技術科学大学の二次試験の様子が夕刊に大きく載っていた。目をつぶりたい様な、それでいて気になる様な複雑な心境でそれを眺めた。

二年前、洋行もこの二次試験に挑戦していたのに……。あの時の小論文に、洋行はどんな事を書いたのだろう。そして面接には何を話したのだろうか。大学、共通一次、この言葉も私の頭から離れない悲しい言葉となってしまった。

昭和六十二年三月十四日の夕刊に、長岡技術大の合格発表が掲載され、私達家族は、有頂天になって喜んでいた。それなのに六十三年九月十四日の夕刊には、事故死として大きく載り私達を奈落の底に突き落としてしまった。全く偶然とはいえ、同じ十四日の夕刊に載るとは……。そして一年半の大学生活に幕を下ろすはめとなった。

長岡は、あの子の短い青春時代を過ごした最後の場所であり、小さな故郷ふるさとであった。私も何時の日か、素直な気持ちで長岡を受け止める事が出来る日が来るだ

る。

合格祝いに戴いた桜の木に、今年は何輪の花が咲いてくれるであろうか。

## セカンド・バッグ

何処へ行くにも手放さなかったというあのセカンドバッグが、事故以来今だに見つかっていない。洋行の大切な遺品として、どうしても捜し出したかったのだが。

あのバッグには、何が入っていたのだろうか。多分、今なお見つからない運転免許証、キャッシュカード、通帳、印鑑、テレホンカード、住所録等ではなかったのか。

あの時、水深五十センチで流されてしまったのか。しかし私は、どうしても不思議でならない。あの遺影に使った写真は、丁度事故の時に、車の中に四、五枚

の写真と一緒に、小さなセロハンの紙袋に入れてギアの横にあったと学生が言っていた。そうだとしたら何故あんなに軽くて小さな写真が、流されずにあり、セカンドバッグが流されてしまったのだろうか。私にはとても偶然として片づけてしまう気持ちにはなれなかった。

どうしても、あのバッグを見つけ出したい。その気持ちが私の頭から離れない。

## 『YOU』

あんなに探し求めていた昭和五十九年の秋、放映された新潟版の『YOU』のビデオが、思いがけず、こんなにも身近な人が持っていたとは。

三月十五日、南高校の親友であった剛君と正隆君が久し振りに洋行に会いに来てくれた。お線香の立ち込める中で、あのお通夜の日、棺の中に入っていた尾瀬の写真は、やはり剛君が入れてくれたものだと分かった。尾瀬の話から甲子園の

話へ、そして「YOU」へと五十九年度は南高校にとっても洋行にとっても、本当に充実した一年であった。

「YOUのビデオ搜してるんだけど、なかなか手に入らなくて……」

「えっ、ビデオ持ってなかつたんですか？井上は持ってるよばかり思ったのに」

「剛君、あなたその時のビデオ持ってるの？」

「はい、持ってます。あの時NHKから、井上がスタジオに友人二人迄連れて来ていいと言われ、僕ともう一人の友人が誘われたんです」

「えっ、本当、すごく嬉しい！あんなに搜していたのに。剛君、あなたが持っていてくれたなんて、ダビングして下さいね。ラジオを通してビデオを持ってる人を捜してもらおうかとも思ってたのよ」

「ダビングして持って来ます」

「ありがとう、剛君。本当に嬉しいわ」

そう言えば四年半前、学校から帰った洋行が顔を紅潮させ、

「俺、今日バスの中でNHKの人に写されたんだ。ほら、俺の好きな『YOU』という番組」

「えっ、本当？　そしてどうしたの」

「うん、それが傑作なんだ。バスが揺れた時、そのはずみで女子高校生が、俺に抱きついてくるとこなんだ」

「あーら、面白いところ写されたのね」

「うん、テーマは『通学路の秘かな楽しみ』っていうんだ」

数日後、NHKのスタジオに来て欲しいという電話があった。すっかり忘れていたが、その時剛君も誘ったとあの子が言っていたのに。何故忘れていたのだろう。彼さえ思い出していたら、もっと早くビデオの中の洋行に会えたのに。

翌日、早速ダビングして持って来てくれたビデオテープをしっかり握りしめながら、体中が熱くなるのを感じた。テープの箱には『通学路の秘かな楽しみ』――  
二三、出演、井上洋行と、ワープロではっきりと打たれていた、剛君が打つてく



れたワープロの字をじっと見つめていると、彼の友情がひしひしと伝わってきて嬉しかった。

その晩、私達は高鳴る胸を押えながら、懐かしい『YOU』に見入っていた。あの軽快なテーマソングが流れ、糸井さんが入院の為、岸部シローさんがピンチヒッターで出演していた。あの当時、家族四人で、テレビを見て笑い合っていたのに……。

私の大好きだった高校時代の洋行の姿を動きあり、声ありのビデオで会うことが出来、私達は興奮のあまり洋行が写る度に、

「ほら、洋行が写ってる」と声を上げて喜んだ。ビデオの中の洋行は終始恥すかしそうに、時々照れ笑いしながらも、質問されると落ち着いて答えていた。本当に懐かしいビデオであった。

今にも、画面から飛び出してきそうな、そんな気がして……。そしたら、洋行の好きなヒレカツ、ハンバーグ、エビピラフ、貝の味噌汁を作って食べさせよう。

あれも話そう、これも話したい。

急に我が家に笑いが戻ってきた。底抜けに明るくあの洋行の笑い声がする。半ば、かすれた、体の底から笑っている、あの何ともいえない笑い声が……。

## 卒業生との別れ

平成元年三月二十三日、二十五日の卒業式を控えていたM二の森野さん、斉藤さん、杉田さん、唐木さんが四年生の小野さんと一緒に洋行に会いに来て下さった。卒業し、それぞれの職場へと巣立っていく四人の姿は、まさに青年の躍動そのものであり、日本をいや世界をも背負っていく若い力が漲っていた。

県外生の四人の学生とは、こんど又何時の日かお会い出来る日が訪れるだろうか。これが最後の別れとなるかも知れない。お互い、遠い空の下で、それぞれの仕事につき、学生の時のような時間は持てないだろう。洋行も生きていてくれた

ら、四年後にM二を卒業することになったのに……。そんな思いで、卒業を目前にした四人の晴れ姿を眺めていた。卒業する先輩達と洋行の最後の別れになるかも知れない、そんな思いの中で卒業を祝い合った。

事故の時、人工呼吸、心臓マッサージをして下さった森野さんをはじめ、先輩達には、感謝の気持ちでいっぱいだった。

十年後、もし彼等達にお会い出来る日が訪れたとしたら、どんなに立派になられていることだろう。そして洋行の記念樹の桜の木も、彼等に負けず大きく育ち、私達家族の目を楽しませてくれることだろう。

六日後の二十九日、森野さんからお礼のお手紙が届き、その中に、大学、自動車部OBに内容報告の為に作成された転落事故に関する報告書と、自動車部の活動、運営に関する報告書が同封されていた。

転落事故に関する報告書によって、事故から半年経った今、私は初めて事故の詳細い内書を知ったのである。

## 生と死

人は何時の日か必ず死に直面する。それが早く来る人も遅く来る人もいる。それは生きている証であり、永久不変でない証でもある。千変万化の世の中、きょうの私は昨日の私ではなかった。我が子の事故死に遭遇して以来、私の心も目まぐるしい変動の中を通り過ぎてきた。

錯乱した頭の中で、励ましの言葉を素直に受け入れ、涙した日々、いつその事、死んでしまおうと馬鹿な事を考えた時もあった。或時は、ひねくれて醜い心に惑わされ、どんな慰めの言葉も空しく感じられ、心の葛藤が続いた時もあった。これは、麻疹の様なもので、一度は通らねばならない悲しい人の性さがではないだろうか。

しかしそこを乗り越え、私が立ち直る事が出来たのは、人の情けと温かい心に

触れ、そして又自動車部員の大きな励ましの助け船があったからである。

どんな慰めの言葉も、愛する者を失った痛手を埋める事は出来ないが、それを土台にして、自分で立ち直る道を見つけ出さねばならない事を、いやという程知らされたのである。

初七日を過ぎた頃であろうか、心の動揺が最大に達していた時、

「人に惑わされず、真実を見つめて、真実に向かって生きて行く事」

と言われたご住職さんの言葉が、大黒柱の様に私を支えてくれたのである。

今まで、生と死を真剣に考えた事もなく、生きている事を当り前と考え、命の大切さを見失いかけていた私達家族に、我が子の死は一つの警告を發したのだ。生きていくうちには、悲しくて辛い事も数多いが、それだからこそ手に握り切れない程の喜びも多い。

## 若者達へ

交通死急増の今日、命の大切さを知らない若者の無軌道さが死を招く事故は多い。この世でたった一つのかげがえのない命、親から戴いた尊い命を無駄にしてはいけない。一秒の心の油断、一秒の判断ミスで美しい花を咲かせずに散ってしまふのは、誠に残念である。

あなたを愛している両親、恋人そして友人の残された人が味わねばならない、想像に絶する深い悲しみがあることを知って欲しい。

厳冬の中を列を作り大空高く飛んでいく白鳥の一羽でも欠けたならば、その列はどうなるだろうか。交通事故の悲劇が平凡な幸せな家庭を一瞬にして闇の中に突き落としてしまう事も忘れないで欲しい。

極限の悲しみに直面し、悲しみをドン底迄味わってしまった私が、若者達に声

を大にして言いたいことは、『たった一つの命』を大切にして欲しいということである。あなたの『命』は、決してあなただけの命ではない事を知って欲しい。